

## 原点に立ち帰って

田尾陽一著「飯館村からの挑戦」(ちくま新書)を読んで、私自身改めて原点に立ち帰りたいと思い、この書評を書いている。

### 1. 資本の意志

資本は利潤を追及して、地球を破壊するまで欲望が止むことがない。”先進国”の物質的繁栄は”後進国”の崩壊、自然の破壊と表裏の関係にある。これは斎藤幸平氏の「人新生の資本論」(集英社新書)に述べられている通りである。資本の暴走は、人間の本能に合致している側面がある。

ところで、私は、マルクスには「共感して一体となり協働する人間の能力」についての視点がないという理由で、斎藤幸平氏のようにマルクスに立ち帰ってそれが解決するとは思わない。ハンナ・アーレントも「カール・マルクスと西欧政治思想の伝統」の中で、「労働するという事は、厳密に言えば生産的ではないという事実に、マルクスは気付かなかった」と批判している。

### 2. 権力の意志

権力は上からの目線で人を支配する。支配され、しいたげられた人々は往々にして、権力者を求め、権力者に奉仕して、無実の人間に刃を向ける。ハンナ・アーレントが「全体主義の起源」で観察した通りである。自らの苦しみを他の恵まれた人に向け攻撃する(転移攻撃)。これも人間の本能に合致している側面がある。

1. と 2. に共通のものとして、

- ① 情報を独占して 情報を操作する。
- ② 上から目線の決定・指示を行い、下には知らせない。
- ③ ①、②を行う権力母体が存在する。

原発は、その構造上、上記1. 2. と ①、②、③を備えたものであった。かくして、必然的に破綻していった。しかしまだ資本と権力に従い、利益を得ているために、粘り続ける人々もいる。

### 3. 共感して一体となり協働する能力

人類の本性は1. 2. だけではない。ネアンデルタール人は、体格も知能もホモ・サピエンスより優れていたが、絶滅ないし吸収されていった。1対1では絶対にならなかつた人類は、共感し想像し協働する能力があり、これが時に他の種族を制圧する力になってきた。一方、人間には仲間の弱者・障害者にも人類以外の生命にも、時には生命のない岩・月・星などにも、喜び・悲しみ・苦しさを投影し共有する能力がある。それを表現し、相互に伝えあう絵画・音楽などのイマジネーションと言葉の力がある。この共感力をもとに、協同して集合し、協同して話し合い、協同して行動した。この大切さは、「ブッダ最後の旅」(中村元訳、岩波文庫)に修行僧らを集めて、ブッダが語った話に残されている。

ベトナムの禅僧ティク・ナット・ハンは、米かいらい軍事政権に国を追われ、ベトナム共産党からも長くスパイとされてきたが、ブッダの「相互依存的同時生起」を提起し、それを理解し実践するには、「理解したいと思うものと、一体になる必要がある」と説く。「相互依存的同時生起」とは、西欧文明と日本が目指した「自立」、「自立に追い立てる社会」ではなく、すべての生命が相互に依存しながら、お互いに立ち上がること(Interdependent Co-arising)を意味し、ブッダの思想の核心とされる。(ラック・ナット・ハン、The heart of Buddha's Teaching, 1999)

共感し一体となる能力は、人類がそれによって生き延び、長く育んできたのである。

### 4. ハンナ・アーレントと東大闘争

ハンナ・アーレントの意義を初めて私に提示してくれたのは田尾陽一であった。人間にとって協働

活動が基本であること、人間にとっての活動には、生産・制作・協働の要素があること、である。コロナで活動が拒まれていた昨年は、マイナスをプラスに転じる絶好の機会となった。私は例年のスキーツアーをやめ、ハンナ・アーレントの読破を試みた。アーレントの「全体主義の起源」（全3冊、みすず書房）は、読んで実につらい本であった。全体主義の下では、人間がいかに残酷になれるかを、アーレントは事実には圧倒される事なく、事実を事実として受け止めつつ、強い思いの下に記載していく。その思いとは何か？ 「アウグスティヌスの愛の概念」（みすず書房）の中で、22才の学位論文の中で、人間の自由について、人間の根源的な存在条件として明らかにしている。それは自由と尊厳である。

私がアーレントの本を読んで始めて腑に落ちた事がある。（アーレント「革命について」「カール・マルクスと西欧政治思想の伝統」）。

一つは、人類のあらゆる革命は、失敗すると成功するにかかわらず、初期の思想や行動が必ず減じ変質していくのは何故か？

二つは、マルクス主義についての、根本的批判である。科学的社会主義というが、人間の自由と尊厳はどこにあるかを見ていない。ギリシャ文化を中心に労働と仕事と活動の分析を行い、労働者階級が権力を奪取すると、人間の自由と尊厳は奪われざるを得ないという考察を行った。全体主義は二つの流れがあった。一つはナチズムであり、一つは共産主義であった。その二つに共通するものは人間の自由と尊厳の破壊であった。二つとも権力に組織された大衆が率先して行っていたのである。

三つは、東大闘争の中に、アーレントの指摘する革命の原点となるものがなかったか？

あった！ それは1969年6月15日の時計台安田講堂占拠より、1969年9月の読売新聞記者を暴行したとして（大部分でっち上げ）、私が逮捕された事件までの約3か月である。そのころは東大全共闘というものではなく、誰でも参加してよい全学代表者会議が、毎週安田講堂総長室で開かれ、私がいきがり上その会議の司会をしていた。医学部処分撤回を含めた7項目要求は、その会議でまとまったものである。

その時代は、東大では、あらゆる所で、人が集まり、討論し、ビラを配り、小さなデモをしていた。時計台前テント村、山本義隆・田尾陽一等の大学院生の全闘連、助手共闘、医学部の駒場（教養学部）を含めた全6学年の討論・行動、41～43青医連、40年入局者会議、若手医師の会、基礎研究者の会（正式名？）等あらゆる所で討議と運動が始まっていた。我々は正に東大という権力の中枢学問所を奪取しようとしていたのである。ここに革命の母体があったと思う。ここでは多数決でなく、問題だと思い立ち上がって何かしようとした個人が集まって、何時間もかけて討議をつづけ、ビラを自ら刷って配り、デモや建物封鎖・占拠などの運動を行っていたのである。まさに田尾陽一の言うこの指止まれ方式であった。ブツダのいう「しばしば会議を開き、会議には多くの人が参集する」であった。ここには各人の自由と尊厳があった。

その闘いの中で、全国の学生・高校生・労働者・市民に運動は広がっていったが、同時に、政府権力や勢力温存を図る既成政党や読売新聞をはじめ一部マスコミによって、根っ子に生きる人たちとの分断が始まっていった。私たちの問題としても、上から目線の妄想にかぶれていたマルクス主義諸セクトの力なしには、国家権力はおろか、共産党・民青との闘いに対処できないという思い込みがあったのではないだろうか？ 私自身もその妄想にとらわれていたと思う。

## 5. 飯舘村の過去・現在・未来

飯舘村で生活するという村民の思いは、想いの詰まった旧佐須小学校の存続であった。佐須小学校は閉校以来、原発事故前まで地区の住民の集いの場所として活用されてきた。虎捕太鼓や婦人会の踊り練習場・発表場所、農作物の発表展示会、囲炉裏端の語らいの場など。

2017年の避難指示解除後は、佐須老人クラブとふくしま再生の会・健康医療ケアチームが協働で開催する健康と生活をささえる交流の場であった。村に戻った村民にとっては再生への希望の架け橋であった。

高齢者や女性たち、若者たちの建物保存の願いは、集落の決め事は家督を継いだ世帯主によるものとする旧弊による多数決で、拒まれてしまった。解体を国の費用でやらせようという世帯主の声で、村に暮らす高齢者や女性の声は無視されてしまったのである。

しかし、この危機にもかかわらず、村に帰った村民とふくしま再生の会は、2020年10月4日、旧小学校の家具や備品や建具を生かして創った「学び舎irori」の完成祝いを行い、更に11月22日に「学び舎irori」の火入れ式を行った。ピンチをチャンスに変えたのである。そこには旧佐須小学校が解体されようとも、小学校と共に生きてきて、またいま年老いても生きようとする村民の思いのもとに「学び舎irori」が出来上がったのである。金で支配しようとする政府に妥協する人々を責めることもなく、政治に翻弄されても挫けることなく生き続ける村民がいる。ここには人間の自由と尊厳がある。

このような村民と協働するふくしま再生の会の活動は、東大闘争を超え、新しい生き方を世界に提示している。

現在は、帰村村民1200名に加え、若い帰村・移住村民180名が加わり、村の再生に取り組み始めている。若者中心のMARBLiNGという新会社が設立されて活動を始め、花卉農家、飯館牛牧場の生産活動、稲作や酒米の再開、太陽光発電等、新しい活動が開始されている。移住した看護師・保健師が設立に奔走した地域住民の健康を支える「あがべご訪問看護ステーション」の活動も始まった。

コメリの店舗跡を借り受けて、協働して話し合い、話し合っては協働するワイワイガヤガヤワクワクの本当の自由な公共空間が創り出されようとしている。人間と人間の間を見直すのみならず、自然と人間の間を見直し、食料やエネルギーの自給率を高めていく村へと歩み出している。

## 6. 精神科医としての自分

現代も30万人が精神病院で幽閉の身となっている世界で最大の精神病院大国・日本では、多剤大量の精神病薬を投与され、薬物により脳が変化しドーパミン過感受性精神病という状態にされた人々が、退院困難な（治療抵抗性と精神医学は名付ける）患者の72%に及ぶと言われる。この日本で精神科医をやっていると、自覚しない限り加害者とされていく。私も無知な精神科医として、加害者となった事が幾度もあり、すっかり忘れていた事を夜中に目覚めて思い出す事もしばしばある。多くの精神障害者は、資本と権力の社会の中で、作られ排除されていく。最後に収容される所が精神病院である。資本と権力の支配が及ばない人間関係や自然との関係の中では、精神障害者が大幅に減り、発病しても予後も良くなり、大部分の人は協働できるようになる。かつて、アメリカ原住民やアイヌの人々は刑務所や精神病院のない社会を築いていたが、破壊されてしまった。現在はフィンランドや一部イタリアで、精神障害者が社会でともに生きているという。治療には共感とイマジネーションと協働が一番大切である。飯館村の活動に参加しながら、私はこれを今更ながら実感している。

”医療は病気を作り、福祉は障害を作る“（沖縄、仲地宗幸氏、当事者参加の焼き肉店キングコング経営）。

三吉讓（精神科医）

2021年4月5日